

福永真弓 著

▶サケをつくる人びと

水産増殖と資源再生
12・10刊 A 5判494頁 本体6300円
東京大学出版会

図書新聞 (2020/02/08) 3434 号 p.3

サケと人との共存

本書は、私たちが「サケをつくる人びと」はもとより、「サケに活かされている人びと」をめざすことを願っているように思えてならない

帰山雅秀

三陸帰ってくるサケがずいぶん少ない。2019年、岩手県へ帰ったサケは70万尾ならず、1970年代はじめの資源水準にまで減少した。本書の舞台である宮古の人たちにとって、苦渋の年であったことと思う。「サケをつくる人びと」は福永真弓氏が10年余をかけた約500頁に至る重厚な大著である。著者はサケと人との関係を「間(あわい)」と呼び、「サケと人が互いに働きかけ(応答)、自律性をもってそれぞれの生を営む時空間的広がり(応答)」と定義する。また川へ産卵回歸したアサケの「南部鼻曲のサケ」を「カワサケ」とよび、「カワサケ」こそ、わたしたちが長く付き合ってきた間(あわい)に生けるサケであり、その群れの帰る河川や沿岸の人間社会と深く関わりながら、人間社会の歴史そのものをその身に刻んできた生きものである」と述べている。

著者は、「生きものを「わたしたちのもの」にするとは、生きもの・モノを生かすための資源として継続して利用できるよう、その生きもの・モノそれ自体や環境を変えようとする働きかけである」とし、明治以前まではサケ漁業は「盛岡藩の施主制」であり、請け負った施主・網主・網子」というトップダウン型の権力構造を生むが、人びとによってサケの生が所有されていったわけではない。「繁殖過程は保護されており、サケは自ら繁殖し、育ち、戻ってくる。サケとヒトの生のかかわりは平衡的であり、自律的である」と論じている。明治以降、サケは互いの領域の間(あわい)に生きる存在としてではなく、非自律的かつ受動的で、人間の欲望のままに支配可能な「モノ」と対象化され、漁業という経済活動にサケが組み込まれたことによ

り人との関係が損なわれていった。そして増殖レシームとケの「モノ化」を加速したと結論付けている。しかし著者は、「本来、増殖とは人の手では及ばないものがあると知りながら、自然の生産力を涵養しようとする思想である。種苗生産・孵化・放流は、あくまでも自然の生産力を取りもどすための一つの手段にすぎない」という大島泰雄の初期の増殖概念を支持している。増殖とは、本来、自然要因とヒューマンインパクトの両面が水圏生態系とそこに生息する生物に及ぼす影響とそれらの動態を科学的に分析し、水圏生態系と生物にダメージがみられる場合、それらのリハビリテーションを図ることである。人工種苗放流は増殖の一つの技術展開に過ぎない。本来の増殖とは産卵親魚の保護(例えば、種川の制、魚付き林)、保護河川や保護水面などの正しく生態系レジリエンスの復興である(帰山雅秀「生態系をベースとした水産資源増殖のあり方」、北田修一・帰山雅秀・浜崎浩幸・谷口順彦編著『水産資源の増殖と保全』(成山堂書店、2008年)所収)。

それでも初期の人工孵化放流事業は、津軽石川にみられるように「在地型人工孵化放流システム」であり、一部のサケを上流へ遡上させ、産卵場で自然繁殖させた。この増殖レシームをムラが支えた。しかし1970年代後半から、増殖レシームは「市場で評価の高い肉質をもった(キンケ)」の数を増やすシナリオへと転換したことに伴い、サケの生はさらにモノ化され、カワサケがサケの再生産過程の中から消えた。サケのモノ化を促進したのが、孵化放流事業の健苗育成、適期放流、親魚の養育という「河川省略型の資源開発」であったという。しかし実態としての「エドデンス」は必ずしもそうではない。例えば「適期放流」についてみてみよう。三陸沿岸では今世紀に入り海水温の上昇に伴いサケ幼魚は6月上旬までには沖合へ移動しなげればならず、それ以前に比べ、沿岸滞留期間が10〜20日短縮した。しかし孵化場からの時期別放流数をみると1980年

年までほとんど変わっていない。すなわち「気候レシーム」が著しく変化しているにもかかわらず「増殖放流レシーム」はほとんど変わっていない。このことは、「適期放流」がほとんど実行されてこなかったことを意味する。著者は、これからのサケとヒトとのあり方を次のように提言する。「人はサケを利用してするために「わたしたちのもの」化しようとする働きかけを止めた。サケとわたしたちは、野生でも家魚でもない間(あわい)に長く生きてきた。わたしたちは、わたしたちとサケが囚われているモノ化から自身をほどき、モノ化された身体をもつて、互いが能動的に自律的にかかわる間(あわい)へと、身を置き直すことができるのではないかと。やっかいではあるが、生きものとしてのカワサケとその生きる環境を再生することだ」と。著者は何度も「サケはだれのものか?」と問う。私は「サケは、サケのものである」と思う。私たちはその恩恵に預かっている過ぎないという謙虚な姿勢が大事なのではないだろうか。サケの生態系サービスについて考えてみよう。サケのもたらす一つの生態系サービスのうち、私たち日本人は、サケを食の糧としての供給サービス、また地域の歴史や文化(例えば、津軽石でいえば「汗石と弘法大師説」)、「又兵衛茶」、食文化、情操・環境教育としての文化的サービスは認知している。しかし、サケによりもたらされる生態系の豊かな生物多様性としての調整サービス、産卵回歸による海起源物質を河川に運ぶ陸域生態系の生産力を豊かにする支持サービスについてはほとんど知られておらず、そのようなシステムをもった生態系もわが国にはきわめて少ない。一方、ロシアやアメリカ大陸ではそのようなシステムを大事に守ろうとしているし、ヨーロッパではかつてあったそのような生態系のレジリエンス復興として野生サケの復活に努力している。本書は、私たちが「サケをつくる人びと」はもとより、「サケに活かされている人びと」をめざすことを願っているように思えてならない。

